

☆年間第16主日(7月19日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

**第一朗読 (知恵の書 12章13、16～19節)**

すべてに心を配る神はあなた以外におられない。  
だから、不正な裁きはしなかったと、  
証言なさる必要はない。  
あなたの力は正義の源、  
あなたは万物を支配することによって、  
あなたの全き権能を信じない者に  
あなたは御力を示され、  
知りつつ挑む者の高慢をとがめられる。  
力を駆使されるあなたは、寛容をもって裁き、  
大いなる慈悲をもってわたしたちを治められる。  
力を用いるのはいつでもお望みのまま。  
神に従う人は人間への愛を持つべきことを、  
あなたはこれらの業を通して御民に教えられた。  
こうして御民に希望を抱かせ、  
罪からの回心をお与えになった。

**第二朗読 (使徒パウロのローマの教会への手紙 8章26～27節)**

皆さん、霊は弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちは  
どう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをも  
って執り成してくださるからです。人の心を見抜く方は、“霊”の思いが  
何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者  
たちのために執り成してくださるからです。

## 福音朗読 (マタイによる福音書 13章 24～43節)

そのとき、イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。芽が出て、実ってみると、毒麦も現れた。僕たちが主人のところに来て言った。『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。』主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか』と言うと、主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。』」

イエスは、別のたとえを持ち出して、彼らに言われた。「天の国はからし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔けば、どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。」

また、別のたとえをお話しになった。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」イエスはこれらのことをみな、たとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いないでは何も語られなかった。それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「わたしは口を開いてたとえを用い、天地創造の時から隠されていたことを告げる。」

それから、イエスは群衆を後に残して家にお入りになった。すると、弟子たちがそばに寄って来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。イエスはお答えになった。「良い種を蒔く者は人の子、畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らである。毒麦を蒔いた敵は悪魔、刈り入れは世の終わりのことで、刈り入れる者は天使たちである。だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそうなるのだ。人の子は天使たちを遣わし、つまずきとなるものすべてと不法を行う者ども

を自分の国から集めさせ、燃え盛る炉の中に投げ込ませるのである。彼らは、そこで泣きわめいて齒ぎしりするだろう。そのとき、正しい人々はその父の国で太陽のように輝く。耳のある者は聞きなさい。」

### 朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

まだまだ梅雨が続きますね。東京都ではこのところ連続で250人を超えてコロナの感染者が増えています。お互いに気を付けましょう。「GO TO TRAVEL キャンペーン」も東京都は外されました。「行くところないー！」という感じですが、命を守りましょう。例年ですと学校は夏休みに突入の時期ですが、こちらもいつ夏休みになるのかなかなか決まらないような気がします。コロナが早いか夏休みの到来が早いか。世界中で不安定感が生活の隅々にまで浸透していますね。今は祈ることしかできませんね。「いや、今、祈ることができるのです」。今こそ祈ることができるのです。私たちはある意味、実のところ追い詰められています。今、祈らなければなりません。「いつ、祈るのですか」、「今でしょ！」。

### 第一朗読 (知恵の書 12章13、16～19節)

主なる神は人々に心を配られ、すべてをいとおしむ方として力を示されると知恵の書は述べています。それゆえに、「神に従う人は人間への愛を持つべきである」と述べています。どこかの神様のように、人から仕えられることだけを望む方ではないのです。人間の弱さをよく知っており、それだからこそ常に心を配り、その願いに耳を傾けられるのです。私たちも今のコロナの時代にこの神に願いを捧げましょう。必ず神のみ旨を実現してくださるでしょう。

## 第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙 8章26～27節）

父なる神に私たちはどう祈るべきかを知りませんが、イエスこそが言葉に表せないうめきをもってとりなしてくださると、パウロは述べています。イエスはかつて弟子たちに「こう祈りなさい」と、教えられましたが、私たちの祈りをイエスは自らの祈りとして御父に取り次いでくださると、言っているのです。私たちの祈りがイエスの祈りとなる。これほど心強いことがあるでしょうか。イエスは私たちを断罪するために来られたのではなく、救うためにこそ来られたからです。

## 福音朗読（マタイによる福音書 13章 1～9節）

今日も先週に続き、「種まき」のたとえ話が語られます。麦と毒麦のたとえ、からし種のたとえ、パン種のたとえなど、イエスのたとえ話は尽きることがありません。この「種(たね)の話」は「成長する」というところにイエスの話の力点があるようです。神様の種が私たちの心に蒔かれるとそれは成長して実を結ぶのです。この話を聞く私たちの心の状態によって、またはこの人を救おうとの神の望みに従って、実を結ぶのです。

からしの種はどんなものかご存じでしょう。食卓で使う「マスタード」の中にある粒粒がそれです。地面に落ちるとどこに行ったか分からなくなるぐらい小さいものです。そのように小さいものにも大きく成長する生命力が宿っているのです。ましてや人間に神が御目を止められないはずはないでしょう。

これは体だけの話ではなく、私たちの心の成長にこそ、神の偉大な力が発揮されているのです。種は水分と熱をもって自らの中に栄養分を作り出しそれをもとに体の細胞を増やして行き、その種の持つDNAに従って体を形作っていきます。

私たちも神から与えられた心の種を増大させて、神に向かって心も体も大きくしていくのです。私たちの心の向きは神に照準があっているのです。



そして私たちの心が神に向かって成長し続けるように父なる神は、心を配り、助けを求める人に、慈しみを注がれるのです。

新型コロナウイルスの感染拡大が続いています。この足立教会の近くでも発病者が出ているようです。神様へのお祈りはご自宅でも十分にできますので、ミサへの参加を無理せずお過ごしください。主日のミサは「足立教会の信徒の皆様」のために捧げていますので、心を合わせてお祈りくださればありがたいです。

カトリック足立教会  
主任司祭 野口重光